

大会 1 日目

2013 年 5 月 25 日（土） 講堂（900 番教室）

本学会の全国大会は今回で 70 回を重ねることとなった。経済学に関わる学会の中では長い伝統を持つと言える域に入ってきたところである。同時に、その伝統ゆえに、社会の変化と変容から遊離する可能性も懸念される。

全国大会 1 日目は、本学会の過去、現在、そして将来を問い直す機会としたい。はじめに、これまで本学会に多大なる貢献をされた故加藤寛先生を中心に、本学会の来し方を振り返る。次に、「信頼性」をキーワードに経済政策研究の現在を考察する。最後に、学会の行く末について、ざっくばらんな意見交換を行う。

09:30-12:00 『加藤寛先生メモリアル・セッション：経済政策学の先駆者』

司会 小澤太郎（慶應義塾大学総合政策学部教授）

(1) 基調講演：「加藤寛先生の業績、学会への貢献」

横山 彰（中央大学総合政策学部教授）

(2) 「加藤寛先生の経済政策学者としての生き方・あり方」

丸尾直美（東京福祉大学客員教授）

(3) その後の経済政策学の発展

① 「経済史における制度：比較歴史制度分析の革新」

岡崎哲二（東京大学大学院経済学研究科教授）

② 「公共選択論の新潮流：非合理性への着目」

小澤太郎（慶應義塾大学総合政策学部教授）

③ 「行財政改革、構造改革と現代日本の経済問題」

奥野正寛

（東京大学名誉教授；慶應義塾大学大学院経済学研究科特任教授）

④ 「税制改革と最適課税論の展開」

林 正義（東京大学大学院経済学研究科准教授）

13:30-14:00 会長講演

日本経済政策学会会長・荒山裕行（名古屋大学大学院経済学研究科教授）

14:10-16:20 共通論題『経済政策に関する信頼性』

司会 内山敏典（九州産業大学経済学部教授）

経済政策の研究は、経済理論と実証を基礎にして、政策提言の作成や政策評価・鑑定などにも関わる。それが、真に政策形成に貢献するためには、社会から信頼に足るものと認められ、信任を得ることが必要であると考えられる。こうした研究に従事する私達は、自分達の仕事について、常に次のように自問することが求められていると言えよう。

- ・それは **credible** か？（客観的に見て十分に信憑性があるか）
- ・それは **reliable** か？（故障や不具合、崩壊を起こさないか）
- ・それは **trustworthy** か？（すべてを委任しても安心か）

Credibility は客観的な情報やデータ、透明性の高い論理構成に基づくものであるか、エビデンス・ベースドかという基準であると考えられる。**Reliability** はシステムやメカニズムとしての長期的安定性や持続可能性、リスク耐性を持っているかという基準と言える。そして、**Trust** とは信託に足るか、主観に照らして信用したいと思えるかという、長期に渡る人間関係と価値観にも関わる基準と言える。こうした3つの基準をすべて満たす時、その政策や研究は、**Confidence** を持つと言えるのではないだろうか。

共通論題では、「信頼性」に焦点を当てて議論を展開する。

招待講演1：「データ・インテンシブな科学はいかに経済政策に貢献できるか」

須藤 修（東京大学大学院情報学環長・教授）

概要：

第4の科学的なパラダイムと言われるe-サイエンスが台頭している。これは、理論、実験、そしてシミュレーションを統合するものであり、データマネジメントや統計学を用いてデータベースあるいはファイルを分析するというデータ・インテンシブな科学である。他方で、政策の遂行には、アウトカムの明確な設定やプロセスの透明性確保が重要となってきている。こうした中、アメリカなどでは、クラウドコンピューティングを採用し、オープンデータという形で政府保有データを公開することで、データ・インテンシブな科学的手法も活用した政策形成・遂行のイノベーションが進展しつつある。こうした動向等を踏まえて、今後の政策のあり方について展望する。

招待講演2：「リスク社会における経済政策」

柳川 隆（神戸大学大学院経済学研究科教授）

概要：

リスク耐性を有し、持続可能で信頼ある経済政策やそうした経済政策のための研究について問題提起する。

16:30-17:40 ラウンドテーブル『全国大会の従心とこれから』

「従心」とは、周知のように、七十而従心所欲不踰矩である。論語では、理想的な君子像を表わすことになる。その意味するところは、特に意図せずとも、礼節を欠くこともなく、事件や問題を起こすこともない。自然体がそのまま君子として尊敬に値する振る舞いになっている、ということであろう。

このことは、裏を返せば、物議を醸すような言動もなければ、論争の火種になることもない、一大センセーションを巻き起こすこともなければ、ムーブメントの発端になることもない、ということでもある。アバンギャルドもなければ、アールヌーボーもユーゲント・シュティールもないということである。

私達は、70回の全国大会を経て、「従心」の境地にあるのだろうか。そして、もしそうだとしたら、「経済」と「政策」を看板に掲げる学会として、果たしてそれでよいのだろうか。

先達の業績と研究の現状を踏まえて、学会の行く末について、パネリストを中心に会場全体で自由闊達な議論を行いたい。

パネリスト（あいうえお順）：

飯田泰之（明治大学政治経済学部准教授）

鈴木伸枝（駒沢大学経済学部准教授）

田中康秀（神戸大学大学院経済学研究科教授）

中村まづる（青山学院大学経済学部教授）

福重元嗣（大阪大学大学院経済学研究科教授）

前田 章（東京大学大学院総合文化研究科特任教授）（兼モデレータ）